

名古屋市市民活動促進委員会 第3回協働連携部会 議事録

1. 日 時 平成23年1月24日（火）午前9時30分～10時30分
2. 場 所 伏見ライフプラザ12階 第1研修室
3. 出席者 萩原なつ子、伊藤一美、栗田暢之、青山直紀、市原兼久
4. 傍聴者 なし
5. 議事録

萩原委員	○私が部会長代理で始めます。まず、事務局からお願いします。
事務局	○よろしくお願いします。皆様、忙しいところご参加いただき、ありがとうございます。18日に開催したシンポジウムには多数の方にご参加をいただき、協働を進める良い機会であったと思います。本委員会は、専門部会をこれまでに9月、11月と2回に渡って開催し、本日が第3回目となっています。専門部会は今日で終わりにさせていただきまして、3月に全体会を開催し今年度の議論の総まとめをする予定になっていますので、よろしくお願いします。では、これ以降は、萩原委員よりお願いします。
萩原委員	○では、資料説明を事務局からお願いします。
事務局	＜資料の説明＞
萩原委員	○ありがとうございます。資料2の中間報告について、ご意見をいただきます。イメージ図などについてもご意見ありましたらお願いします。
事務局	○17頁の中間協働体のイメージをホワイトボードに書きました。17頁に記載した図が分かりにくいと言うご指摘がありましたので事前に萩原委員と相談し、修正したものです。
萩原委員	○当初、土曜日に打合せをさせていただき、この資料だと固まりすぎているので分かりにくいと言う指摘をしました。元々の図と見比べてください。中間協働体という呼称より名古屋の人が分かりやすい言葉や具体的なイメージが分かりやすい名称が良いと思います。資料だとそれぞれの組織からコーディネーターを集めるイメージになっています。コーディネーターは支援センターなどの資源を活用する方が良いと思います。課題の解決のためにNPOと行政などが協力しあうのが協働であり、それをコーディネートするイメージです。資料のイメージでは、中間協働体で協働すること自体が目的になってしまいます。課題によって協働のありかたを示していくのが良く、協働が目的ではありません。どことどこが繋がった方が良く、というのをコーディネートするのが良いと思います。
伊藤委員	○中間報告18頁で、協働が2つに分かれています。名古屋型を考えた場合、区政協力委員会や学区連絡協議会の名称をいれないと、別の組織を作り出しているイメージを与え、地域と気持ちが離れてしまうのではないかという気がしています。学区連絡協議会は、子ども会、環境部会、防犯・防災、交通、体育、まちづくりなどがありますが、自分たちの活動で手一杯であるところに、学生や行政が入って、彼らと一緒に解決するといった方が、

	市民活動の促進としては裾野が広がると思います。そのことが一切入っていないのはなぜでしょうか。
事務局	○「もりあげ隊」には地域の方々も入っていると思います。具体的にやってみようことを考えると、地縁組織を「もりあげ隊」の中に入れて書くということになると思います。
栗田委員	○地域にはいろいろな組織がある、と言うと怒られます。
伊藤委員	○いろいろではなく個別に認めてくれと言われます。
事務局	○それぞれの組織を「もりあげ隊」に入れた方がよいでしょうか。
伊藤委員	○社会的課題に近づけた方がよいのかなという気がしています。先日のシンポジウムで、グループワークの中に災害ボランティアの方がいらっちゃって、「会社を引退したあとボランティアに入ったが、地域に入ろうとすると、来るなと言われた」と言ってみえたので、そのイメージかもしれません。また、社会的課題という言葉の意味が分からず、それは何かと言われました。災害ボランティアとしての気持ちを埋める場所が欲しいと言っていました。
萩原委員	○地域的、社会的、個人的課題とすれば良いですか。
伊藤委員	○分かっている人は分かるが、知らない人はこの図式からは読み取れないと思います。市民にこれは公表するのですか。
事務局	○最終的には公表しますが、一般市民に向ける前に、当事者に訴えかけるものにしたいということです。中間支援などの方たちに意識を持ってもらう必要があります、それぞれに意識を高めるやりかたを考えたいと思います。地縁組織として書くのは問題ないが、固有名詞を書くのは難しいと思います。
市原委員	○以前、伊藤委員の発言で、地域で NPO が地縁組織と関わろうとすると NPO の名前を出すなと言われたという経験があったとのことなので、それをどう乗り越えるかは、名古屋型のこの先どうするかという重要なポイントです。
萩原委員	○地縁組織と NPO の協働は分科会等を設けて検討の方がよいと思います。そのような事例が出始めているので、これを盛り込むことで、そこを打破する必要があります。
事務局	○上から乗り越えるより、事例を積み上げるほうが現実的だと感じます。
栗田委員	○さっきの伊藤委員の話は、養成講座を受けてから、地域に入りやすくなったと言う声もあります。
萩原委員	○手引書に全部入れるのは難しいので、事例集を作っても良いと思います。基礎自治体との協働とかです。
事務局	○次年度、事例を入れてまとめると良いかもしれません。

栗田委員	○中間支援 NPO がその役割を果たしているかと言うと疑問です。会費を払っているけれど恩恵がありません。自分達でやってくれと言われるが、単独の NPO では限界があります。防災でも 16 区に防災ボランティアがあり、我々が中間支援みたいなものです。NPO としてどうしていくかの議論をしないと駄目だと思います。中間支援 NPO と言っているだけではいけません。
萩原委員	○それぞれの NPO が中間支援を担っています。センターも中間支援をやっており、中間支援の定義はされるが、実際はどうでしょうか。
伊藤委員	○中間支援として動くには名古屋は広すぎると思います。260 学区の全てをみるのは難しく、自らの地域は分かるがそれ以外は無理ではないでしょうか。中間支援 NPO とするとオールマイティーにみえるので、その名称を変えるとか、各地に中間支援を作るとかの形が良いのかなと思います。
萩原委員	○横浜は各区に中間支援があります。それよりは NPO が集まって自分達でなんとかしたほうが良いかもしれません。
栗田委員	○NPO の集まりがないのが課題です。
市原委員	○昨年 12 月に中間支援の NPO に集ってもらい、「新しい公共支援事業」の事業スキームの説明と、どんな事業を展開したら良いのか意見交換しました。その中で、NPO の連絡会みたいなものをやってもらおうと、意見交換しやすいという話がありました。来年度、支援事業の 1 つとして、NPO のネットワーク作りをやりたいとは思っています。
栗田委員	○今の団体が中間支援の役割を果たしているか疑問があります。
市原委員	○県からすると、NPO 向けの人材育成とか会計とか労務とかそういったセミナーとかやっており、そのパートナーとしては、中間支援の NPO に事業をお願いしているので、その意味では、中間支援として付き合っています。現場から見る中間支援の役割とずれがあるかもしれません。
萩原委員	○このイメージ図はこれから絵が変わると思います。
栗田委員	○社会福祉協議会はどのような役割を果たすのですか。名古屋は、市にも区にもあって、それぞれが独立しており、それぞれの意思を持っています。なかなかまとめられるものでもないと思います。
伊藤委員	○社会福祉協議会も介護や障がい者支援、子育て、福祉などの課題をもっており、支援センターに入るより、中間支援に入るのではないのでしょうか。
市原委員	○社会福祉協議会も全部に関わるイメージが良いのではないのでしょうか。NPO は中間支援も現場も関わるイメージなので、同様に現場と中間支援の両方に関わるイメージではどうでしょうか。
事務局	○地域の拠点に、今後区の社会福祉協議会が関わることもありうるため、この図に入れました。もちろん両方の面があります。

萩原委員	○一枚の絵にするのは難しいと思います。
栗田委員	○NPO と対比するのも難しいです。
事務局	○現状ではなく、今後のありかたを書いているので、これで、今後の意識を持ってもらいたいと考えています。あるべき姿を書いて、努力してもらえたら、と思っています。中間支援の役割をもっと意識してはどうかということです。
萩原委員	○足りないものはないですか。行政側の問題と NPO の問題があります。支援センターの役割としては、充分ではないということです。
市原委員	○資料では専門家と学生が分かれています、それはどのようなイメージですか。
萩原委員	○専門家と学生は役割が違うということを想定しています。
市原委員	○専門家は大学の教員などをイメージして、大学を背景とした専門家と学生とを整理しているのでしょうか。今回のイメージは、専門家は有識者だけでないということですね。
事務局	○一般市民の専門家も入ります。
萩原委員	○市民専門家も入るので、協働において NPO の専門性を期待することができると考え、そこも入っています。
市原委員	○学生の役割はどのようなイメージですか。
萩原委員	○市民活動として行動をしている学生もあり、高校も含めて活動しているグループです。大学でも NPO の講座がありますので、そのような学生を組織化していくイメージです。
市原委員	○17 頁の絵だと大学から学生に矢印がありますが、そうすると絵がもう一つ必要です。中間支援のイメージだけでなく、組織との繋がりが必要です。
事務局	○17 頁の絵は、中間協働体のイメージを書いています。実際、中間協働体のイメージが分かりにくいので、「名古屋の協働もりあげ隊」など分かりやすい名前にして、地域の人々が気付いている課題などを解決するため、支援センターが果たすべき役割を書いています。プレイヤーと支援とを分けたという絵になっています。18 頁に目指すべき姿があり、その中にどう入れ込むかも悩ましいところです。名古屋の実態に即した絵があり、方向性が見えるようなものがあれば良いと思います。
萩原委員	○18 頁の絵も疑問です。協働の場は課題がある場所であり、この絵の場は協議の場であり、協働の場ではないと思います。
事務局	○シンポジウムのような意見交換する場があり、そのまわりで協働があるイメージです。

市原委員	○17 頁は今回の絵に置き換わり、外からのイメージは修正するというです。18 頁の協働の場は現場のイメージなので、先生のイメージとちょっと違うということですか。
萩原委員	○協議の場なら良いのですが。協働の場は現場です。中間協働体という言葉は疑問です。
事務局	○今日ホワイトボードに描いた絵を出発点にしたいと思っています。プレイヤーと支援を分けているのは、「もりあげ隊」の事務局であり、そこに協働コーディネーターの場があり、行政や個別の企業と繋ぐというイメージです。
萩原委員	○個別の企業は人が変わり難いと思います。その役割をコーディネーターを果たすのは難しいと思います。企業が出す人材の問題もあります。企業とのコーディネーターをつくるのは難しいです。誰がコーディネーターとして入るのか、個人か、その集合体か、支援センターか、その支援センターも公設民営なのか、公設公営なのか問題です。
市原委員	○京都府では 5 人の協働コーディネーターを NPO 職員として採用しているとのこと。
萩原委員	○神奈川県も公設公営ですが、施設管理は委託しています。宮城県は、公設民営で今では指定管理となっていますが、以前は競争入札でした。
栗田委員	○協働の場に今まで NPO が関係なく、中間支援と行政がやっていました。
萩原委員	○委託はそうになっています。
栗田委員	○県や市が相談するのは中間支援 NPO です。しかし、そこだけでは我々の意見を代表していないと思います。協働コーディネーターに中間支援だけ入っている従来の構図が破れると良いと思います。
萩原委員	○協働コーディネーターとして各団体から人は出せるのでしょうか。
栗田委員	○常駐は無理ですが、週に何回か時給いくらでという事であれば、内容によってはむしろ積極的に出すべきだと思います。
市原委員	○その場合は、非常勤嘱託と言うことですね。
萩原委員	○そうすると、NPO 同士が繋がります。NPO でも異なった活動をしているので、きっかけの仕組みを作るのが良いと思います。
栗田委員	○若い人が協働コーディネーターに参加する事で育成にもなります。また、今は男性がいません。これで食っていけないという人が多い。女性のほうが冒険心やチャレンジ精神もあります。優秀なのは女性です。
市原委員	○雇用状況をみたら、初任給が 200 万円くらいです。理事長でも 280 万円くらいです。目標を上げないと偉くなっても給料が変わらず、進路として選択しづらいです。

萩原委員	○そうすると、人生のどこかで NPO ということになります
市原委員	○人材を NPO にそれぞれ派遣してということができると良いです。
萩原委員	○お金は国が出して研修するという国もあります。この際、新しい提案を思い切って出してみてもはどうでしょうか。
事務局	○本日提案した絵が資料の 17 頁の図より違和感がなければ、これをベースにさらに検討します。
萩原委員	○最初はパソコンでつくらず、フリーハンドで作ってください。
栗田委員	○17 頁と 18 頁とどういう違いがあるのですか。
事務局	○17 頁は中間協働体の話です。
萩原委員	○高校が図に入っていないので、地域に入れてください。
伊藤委員	○高校は、いろいろな地域からきています。
萩原委員	○多気町の「まごの店」が評価されています。高校は県立ですが、町にある高校は町が応援するのは当たり前ということで、町の宝として協力して、高校生が地産地消のレストランをやっています。地域で応援するという感じでやっています。高校の存在が重要であり、日本全体がそのような感じになってきています。それをどこに入れるのかが問題です。多気町の影響でいろいろ出てきています。これは、もう一回絵をフリーハンドで再度考えて欲しいです。
市原委員	○中間支援の言葉が消えて、NPO が支援でも現場でも活躍する。社会福祉協議会も中間支援でも現場でも活躍するというイメージではどうですか。
萩原委員	○地縁組織は、現場ですか。
栗田委員	○エンドユーザーでもあります。
萩原委員	○協働コーディネーターにも入るし、現場にも入ります。
事務局	○災害ボランティアの中には、実際に地域における協働コーディネーターのような動きをされている人がいます。そのような人は区役所にもどんどん入って行って、地域と行政との協働を実践しています。
栗田委員	○我々は防災の団体で地域との繋がりを作っています。まちづくりの担い手であり、中間支援 NPO もそこだけが中間支援としてまちづくりをやっているのではなく、多くの NPO がまちづくりをやっているのです。そこを意識せずに、協働コーディネーターに民生委員や区政協力委員が入って、防災という枠組みを利用して地域を作っているのです。協働コーディネーターにそのような方が入っていきやすいのが大事だと思います。

萩原委員	○文章として書いていくことが大事です。
栗田委員	○社会福祉協議会は地縁組織に近いです。そこまでの信頼を NPO は得ていないということです。
事務局	○地域福祉推進協議会は地域の人々が主体です。区によっては実情が違っているので、一概に当てはめると問題があります。ニーズがあってできるところから意識を高めていくのが、1つのやり方なのかなと思います。
萩原委員	○ノッドワークと言うことで、ゆるやかに連携して、結びつきを作っていくことが大事です。何かある時には結びつきを強くします。終わったら解きます。結んで開いてを行う、ノッドワークが大事です。結び続けると癒着になったり他の人が入って来られなくなったりするので、一旦開くのが大事です。
市原委員	○2月17日に NPO スタッフと若手県職員の「つなぎ場」をやろうとしていますが、全国にそのようなものはありますか。
萩原委員	○あまり聞いたことがないです。
市原委員	○何らかの形で、先輩から後輩へとか友達へとかに繋いでいくものです。これは、愛知県の新規採用の現場研修を行う人達を集めて受け入れ先の NPO と語り合い、輪を繋ぎながら広げていくものです。
萩原委員	○それはどちらかというとネットワークですね。結び目は課題に対してあり、それが解決すると解くものです。だから、協働コーディネーターには多様な人がいると結び目を作りやすいということです。イメージ図をフリーハンド、カラーで作ってください。
事務局	○「なごやの協働もりあげ隊」という名称はどうですか。関係性については、またいろいろな方から意見をいただきます。
萩原委員	○支援センターが関係資本とどのような関係を作っていくのか、関係資本をどう活かしていくのか、いわゆる社会資本ですね。
市原委員	○会の名称は、協働ですか、市民活動ですか。
事務局	○「市民活動もりあげ隊」ということなのですが、イメージが大きすぎるので、協働をもりあげるとしています。支援センターの運営のイメージはもう一方の部会で議論しています。この図のイメージが固まると名古屋市としての方向性が決まってくるのではないのでしょうか。協働の手引書にも絵を入れられると良いと思っています。現在の仮説として作っていき、多くの NPO に分かりやすい言葉で、概ねの方向性をこれでコンセンサスを得られれば良いと思っています。 では、合同部会へ移ります。